
I.O.Lデビューキャンペーンは危険が一杯！？

小林アサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・O・Lデビュー・キャンペーンは危険が一杯！？

【著者名】

小林アサ

【あらすじ】

「ご興味を持つてくださいありがとうございます。」
このお話は現在三分の一くらいまでの進行状況です。
キーワードにも書いてありますが、BLも恋愛要素も皆無ですが、
美形男子五人組が事件に巻き込まれて右往左往するお話ですので、
一応乙女系としてあります。よろしくお願ひいたします。

本州からほんの少しだけ離れたとある島『イオフロート』。
観光用施設が整備されてはいたが、

どつにも客足が伸びず、いたその島は、
テレビ局や研究施設更には遊園地まで整備され、生まれ変わらうつと
していた。

一年間のプロモーション活動を経て、遊園地が運営開始になる当日、
記念式典へ臨もうとしていた、
イオフロートの宣伝のために結成されたグループ『エ・オ・・』へ
島を運営する会社『イオトラスト』の代表の乗ったヘリが、
事故にあつたという報せが舞い込む。

憂いのある艶ボイスが特徴の歌手の在原君影、
爽やか高学歴イケメンお笑い芸人の西明志智、
驚異的な運動神経の活字中毒俳優の春日多喜、
天才少年の子供タレント、シユティア・・・・シユレダー、
静かなる美形モデル、神鳥ルイ、

この五人が、あやしい舞台監督、あやしいパンダの着ぐるみ、あや
しいチヤイナ服の女性に翻弄されながらも、
問題を乗り切つて行くライトサスペンス。
(のはず。)

The show must go on - 01 - (前書き)

ええと、基本的に男の子五人組が、恋愛要素もなくわいわいやつて
いるのがメインの小説です。

The show must go on - 01 -

> i7562 | 1202 <

イラスト・洲富ヒロ

【The show must go on】

01

「なんや…、えらい様子がオカシイやんか」

入り口を固める警備員にバスを見せ、セレモニー会場へ勢い良く足を踏み入れた西明志智^{さいめいしち}が急に立ち止まり、きょろきょろと会場内を見渡し始める。

野外での結婚披露宴よろしく、行楽エリア内の公園にしつらえたセレモニー会場内はざわめきながらも何故か妙に閑散としていた。

「ああ、そうだな」

続いて入つて来た在原君影^{ありはらきみかげ}の田にも、厳しい表情で片耳を手で押さえながら逆の耳に携帯電話をあて喋つている礼服姿の中年男性がうつっていた。他にも、似たような格好で似たような動作をする人々が会場内に点在しているのが見える。異様な光景だと君影は思った。

明らかに、パーティーという雰囲気ではなかつた。

「…あ…」

志智と君影^{かずがたき}が立ち止まつたのに合わせて、背後で同じように立ち止まつた春日多喜^{かすがたき}が人差し指を中央にあるステージへ向けた。

「どうした？ 多喜」

三人の視線が、多喜に集まる。

「…マネージャー、あそこ」

言葉少なに告げる多喜は無言でわざと歩き出してしまう。

「おおい、多喜ちょい待ち~」

すかさず志智が声をかけたが多喜は止まらない。

「とりあえず、マネージャーに状況を聞いてみましょうか。何か異変が起こっているのは確実なようですし」

君影と志智の視線の範囲外の下方よりショティア・レ・ショレダの不機嫌な声が一人を促した。

「…ショティ、まだ怒ってるんだ?」

「こういう、段取りが悪い状況が嫌いなだけです。全く、あのマネージャーは何をやつてるんですか」

ショティが君影の下方からキツイ眼差しを向けながらそう言つと、ぶいつという擬音が聞こえそうな踵を返したので怒つてゐるんだな、と君影は思つた。

数時間前のことである。

君影の携帯電話が鳴り出した。

そろそろ携帯が鳴る頃かなと思いつつ、リビングのテーブルの上にある苔の鉢に霧吹きをかけていた。

ちやかちやかとした音楽が流れ出す。それは、電話の向こうの相手をイメージし、君影自ら作曲したもので、彼の職業のロックミュージシャンという部分が遺憾なく發揮されていた。

「はい、おはよーさんマネージャー」

『あつ…！　お、おはよーござります、君影くん！』

何度もつつかえながら、勢い込んで話し出す様子がいつまで経つても物なれないな…、と苦笑を誘う。

『あつ…あのつ！　そ、そろそろ、セレモニー会場に向かつ準備を…　と思いまして…』

セレモニー会場とは、数時間後に始まる、君影が参加するイベントとしては生涯の中で一番大きなイベントとなるであろう記念式典の会場のことである。

在原君影、年齢二十一歳。現在、エ・オ・エプロダクションに在

ありはら
きみかげ

籍するロックミュージシャン。

少し長めの深紅の髪、深い翡翠色の瞳、その右耳の下には泣きほ

くろがあり、年齢の割に艶と憂いを感じさせる青年である。

「おひ、サンキュー。用意したら、他の奴らピックアップしていくわー」

性格は意外にもくだけた面倒見の良い常識人であり、嗜好にいたつては…。

『す、す、すいません、いつも…よ…よろしくお願ひします!』
いつもながら肩が凝りそうな性格だなと君影は思った。生真面目過ぎるマネージャーは緊張を解くといつことを知らないようだな、とも思い苦笑を深めた。

君影は通話を終えると、苔の鉢の湿り気具合を確認する。

「お、今日もいい湿り気じやん」

嗜好にいたつては、苔を育てるところひとつ年齢や職業の割に少し渋めなところがあつた。

君影自身、今は作詞も作曲もこなすシンガーソングライターのような仕事を請け負うことが多いのだが、元々はビジュアル系に近いバンドを組み、その中で君影はボーカルを担当していた。ボーカリストの喉は湿度を必要とする、でも、機械には頼りたくない。そんな理由が今の彼の嗜好を作り上げていた。

君影は「機嫌な素振りでシャワーへと向かう。

なんといっても、今日は晴れの舞台だ、自然とテンションが上がつてしまつた自分でも自覚した。

The show must go on - 01 - (後書き)

つづきます。

本州からほんの少しだけ離れたとある島…。
それが今現在の君影がいる場所だ。

一旦「デビューをしたもののメジャー・デビューのチャンスを掴みかけたところで活動ができなくなり、その後は、実家に帰ることをせず東京の片隅で細々とバーテンダーをしていた。あの頃からもう約二年になる。

随分と様変わりをしてしまった、景色も、環境も自分も。

君影は、自分の部屋を出てマンション内の廊下を歩いていた。
このマンションは、職住近接の考え方から隣に建っているテレビ局に付随する高級ホテルといった趣で作られている。個室ラウンジ、貸し会議室、フィットネス、来客対応…あらゆるニーズに対応できるようになつており、プライバシーの配慮の観点から、外を出歩かなくてもテレビ局はあるが、他のエリアへ行くこともできるようになつている。

ただ、意図的に外に出ない限り外の空気に触れられない点が思考に閉塞感を生んでしまう。従つて考えることがどうしても内に向かつてしまいがちなのが難点だ。

(すっかりオカン役が定着しちまつたな…)

I.O.Lプロデュースの社長の誘いに乗つて島に来てからかれこれ二年、様々なレッスンをこなしつつ、そして様々な職種の四人のタレントと一緒に一つのグループとしてプロモーション活動に勤しんでいるうちに、いつの間にか君影がまとめ役になつてしまつていた。

昔だったら、メジャー・デビューを控えた自分が、いくらマネージャーが頼りないからといって、他のメンバーのピックアップ…迎え

に行くことなど考えもしなかつただろう。

まあ、そんな自分が嫌いではないんだけども…とひとりごちた。

今日の段取りは、自分が三人のメンバーを拾つて会場に入る、会場内で他の客に混ざつて待機し、式典の時間に合わせてヘリコプターで会場まで乗り付けて来るプロダクションの社長と社長のエースコード役のメンバー一人が華々しく登場したところに舞台上で合流するということになっている。

電話をかけてきた頼りのないマネージャーは会場での受け入れ担当だ。

君影は腕時計で時間を確認した。

「…多少早いけども、まずは、志智から拾うか…」

西明志智、年齢二十歳。同じエ・オ・レプロダクションに在籍するお笑いタレント。

君影は、年齢が近いせいなのか他のメンバーよりも自分と同じ田線で喋ることができる、お笑いとは思えない澄んだ蒼色の髪をした爽やかさが売りの流行のイケメン高学歴な一世タレントの顔を思い浮かべながら、若干歩みを早めた。

志智の携帯電話が鳴った。

着信画面を見るまでもなく、志智は相手が君影だと分かった。

リビングのソファーに片足を抱くように座りながら、左手で趣味のカウチポテト用にハードディスクレコーダーに録画したい番組を取り捨選択していた志智は、リモコンをローテーブルの上に置くと変わりに携帯電話を取り上げた。

あの世話焼きロツクミュージシャンは、志智のイメージで作ったという着メロを『一寧』にも君影自身で使うだけではなく志智にもメールでよこしていたからだ。意外とキッチリ志智好みに作られていたのでうつかり志智も君影からの着信音に使ってしまっていた。

『しーちゃん、あ～そび～ましょ～』

通話ボタンを押すなり、地を這うような声で君影が喋った。一瞬、

通話終了ボタンを押してもいいかなと志智は思つたが、用件は分かっていたので会話に応じる。

(漫画の読み過ぎだ、漫画の)

「すまんな〜、おっしゃん今日は忙しうで、遊びにいかれへんのや、帰つてくれる〜?」

『なんだそれ、ノリ悪いな〜』

「ノリ悪いも何も、そっちこそいきなり気持ち悪いつちゅーの。何やのもう、今どこにあるん?」

『玄関』

「どこの〜?」

『お前んちの』

志智はリビングの壁掛け時計を見た。

「早過ぎるわボケ! !

君影は予定の時間より30分以上早かつた。

そこからの志智の行動は早かつた。

通話を切らず無言のままダッシュで玄関まで駆けて行き玄関のドアを勢い良く大きく開いた。自分が驚かされたから、意表をついて驚かそうという意図で…、もちろん、玄関のドアの向いの君影に当てるつもりだ。

「うわーとー おまー… 何すんだよあぶねーだろ!」の七輪野郎!

携帯電話を耳に当てながら才でのといひで君影は後ろへ飛び退いた。

「んだと? 人を練炭炊く道具みたいに言うなや、この老人系超朝型野郎! ちつたー人の迷惑考えりつちゅーの」

互いに憎まれ口を叩き合いながらも、志智は「まあ、入つとけば?」と君影を室内へと促し、君影もまた勝手知つたる他人の家とつた風情でリビングに置かれたソファへと腰を下ろした。

「ちょ、そこで待つとけよ〜?」

志智はというと、リビングのソファへは腰を下ろさず出かける用

意をするためにベッドルームへ向かう。

「何か適当にビデオ見てもいいか？」

「ええよ、勝手に何か見てくつろいどいて～」

君影の声が背中から追いかけて来たので、志智は振り向かずに片手を振りつつ答えた。

きつちり三十分使って用意を済ませた志智はリビングに戻って君影に聞いた。

「次は誰んとこに行くん？」

「寝坊助なガキンちよ。…にしても遅かつたな」

「な～に～が～？」

ひきつとこめかみに青筋を浮かべながら一音一音間延びさせて志智は答えた。もちろん、君影の意図は分かっている。予定時間より早く来すぎる方が悪いのだ。

「用～意が～」

君影も志智と同じ要領で答える。

「仕方ない、おれ、お洒落さんだもん」

悪びれずさらりと志智は答えた。確かに、志智の服装は雑誌に出てくるようなアイテムで構成されていた。

というか、日頃「シイラはオレのお母さん！」と言つてはばかりない、シイラデザインのお気に入りの蒼系アイテムで上から下までばっかりキメているつもりだ。

「そつか、次は多喜かあ」

寝坊助なガキンちよという表現で、志智は次に迎えに行くのが春田多喜だということを察した。

時間がかかりそうだな、と志智は思つた。

「おれ、多喜の後に呼びに来て貰つても良かつたんじゃない？ おれ車で待つてようかなあ」

「時間のかからなさそうな仕事は先に片付けて、時間がかかりそうな方へ時間を割くのが基本だろ。すぐ近くなんだから一緒に来いよ」

そういうことか？ と首を傾げた志智に、君影はにやりと笑つた。

「旅は道連れ世は情けってな

「はあ？ 道連れって素直に言えばええやん」

むしろ、一蓮托生なんだな…と志智は肩を落とした。

I.O.Lプロダンクション所属のタレントは、この島の芸能工リアと呼ばれる地域の一画にあるマンションの中に全員が部屋を持つている。

つまり、君影も志智もこれから迎えに行く多喜、それからもつ一人も同じマンション内に住んでいたため、迎えに行く作業はとても楽だった。

「多喜もさあ、朝早くから身体鍛え始めるのはええんやけど、普通の人の活動時間になると寝ちゃうつていう癖、あれ、いい加減直さないとヤバいよな~」

いつか、大きな遅刻の元になるって、と、志智が、頭の後ろで腕を組みながら言つ。

「お前の趣味の夜中のカウチポテトと、どっちが遅刻する原因になるかつて考えたことあるか?」

君影は、他人の振り見て我が振り直せだ、と冷たく応じる。

「まだ遅刻してないってば、おれ。ちゃんと加減してるやん」

春日多喜、年齢十九歳。やはりI.O.Lプロダンクション所属の俳優。活字中毒の氣がある大人しい氣性であるにも関わらず、化け物じみた運動能力を持つ寡黙な青年。寡黙とは言つても、ストイックな寡黙さではなく何も考えていないのではないかと思えるようなぼーっとしたところがあるのだ。

化け物じみた運動能力は、天性の資質だけでもかなつてゐるわけではないようで夜が明ける頃から外に出て行く。そのため、普通の人々が朝ご飯を食べるような時間は多喜は熟睡中ということがよくある。

「多喜、起きてるかなあ」

志智はもう一度天井をみながら言つた。

寝てたらどうやって起こしたらいいんだろう? といつ言外の疑問を君影は察した。

さて、この島は、観光開発されていたものを客足が伸びなかつたため開発を行つた会社が倒産、そこを、一束三文というには莫大な費用だとは思うが、朱鷺羽グループという元財閥のご令嬢が幼い頃に彼女の祖父に頼んで島を丸ごと一束三文で買つてもらい、自分の好きなように再開発を行つた。

その、「ご令嬢」というのは、君影の目から見ると良く言えばアグレッシブな女性で、悪く言えば自分至上主義の女王様…。そんなお嬢様がこの島を開発するはどうなるのか?

結構まともな開発内容だつた。

島をだいたい「観光エリア」「行楽エリア」「芸能エリア」「学术研究エリア」と四つ、それぞれにテーマを持たせ分割した。

分割するだけでなくそれぞれ相互に連動させた。

芸能エリアは学术研究エリアでの成果を番組制作をし注目を集め資金調達に一役買い、学術研究エリアは島のインフラ整備を研究して、他のエリアでどういう結果になつたかのフィードバックを得る、研究成果はそのまま観光資源やインフラへと流用、そんな風に全てが連動し島一つで完結するようにお嬢様の気のむくままに好みのデザインで作り上げられた。

君影たちが所属するI・O・Lプロダクションというのは、その芸能エリアで制作される番組に出演するタレントのマネージメントを行う会社となつてゐる。

今から一年前、歌手、お笑い芸人、俳優、子供タレント、モデル…おおよそ人が興味を持つと思われる分野のタレントを一人ずつ集め宣伝グループを結成させた。お嬢様のスカウトや縁故によつて集められた君影たちは、この島へ本州から人を集めるための宣伝活動の役割を担うことになつた。

年齢も職業も更には人種までもばらばらなグループで、最初はどうなることかと思ったが、まあ、一年の間にアイドルグループと呼んで差し支えない程度にはなんとか形になってきた、と君影は評価している。

案の定、多喜は寝ていた。

多喜の携帯電話が鳴っている。

…ような気がする、と多喜はうつすらと呟いた。

着信音は何かぐもった感じに聞こえる、そしてとても小さく。身体に触れている訳ではないのだがかすかに振動を感じる。

「…………

なんである。

覚醒しきっていない脳みそは積極的に情報を仕入れにはいかないらしい。

なんである。

一回同じやう思ったとき。

また、ぐぐもった音で遠くの方から鉄扉を開閉する音が聞こえた。

…ような気がする。

「なんや、合鍵持つてんなら最初から言えっちゅーのー。十五分損したわー!」

「自力で起きれるならそれによることはないだろー。こちこちうつせーなー!」

じずじすぎやあぎやあと賑やかな声が近づいて来た。
お迎えの時間か…と多喜は理解した。

「多喜ー！ どこだー？」

「いないんかー？」

(あ、そうか、今日は式典の日だつけ…)

多喜はなんとなく状況を理解した。
がちやっと部屋のドアが開かれる。

「うわっ、地震か？」

「雪崩れとる…本が…」

口々に君影と志智が叫んだのを聞いて本格的に自分の置かれている状況を理解した多喜は、身体を動かした。

「あ！ 多喜」

「ちょ、どうしたん！？」

多喜は本の山に埋もれていたのだった。
身体を少し動かしたことによって、自分の身体の上の本が滑り落ちてあらわになつたのを感じた。

その瞬間、襟首を掴まれた。

「よつす寝坊助、行くぞ～」

至近距離から君影が言つ。

「へりと多喜は頷いた。

「ちょ、君くんそのまま引きずつてく氣ー！？」

慌てたような志智の声がした。

楽でいいかな、と多喜は思つていた。

「なんで、あんなことになつたんだ?」

「なんで、本があんなに大量にあつたん?」

「なんで、パンダ?」

同じだつたのは最初の三文字だけだつた。

まつたく同じタイミングで同じ始まり方をしたのだつたが、まつたく話が噛み合なかつた。

「……」

「……」

「……」

無言で立ち止まる三人。

君影は掴んでいた多喜の襟首をようやくこの時になつて離した。お迎え行脚の一一行は、もう一人のメンバーを迎えて行く為にマンショーンと地下同士で繋がっているテレビ局の建物に来ていた。

君影と志智は進行方向を向いている、引きずられていた多喜は、進行方向とは逆を向いている。

各々の思いが交錯する沈黙を経て、何を誰の疑問を優先させるかを吟味した結果、君影と志智はくるりと、多喜の方へ向き直つた。

「なにが、パンダ?」

今度は異口同音になることができた。

「……もういない、着ぐるみ」

一瞬だけ、パンダの着ぐるみがいた。多喜の目ににはさうつづった
「ふーん。まあ、ここは局内だし、パンダの着ぐるみの一匹や二匹
いても、そんなにおかしくはないよな」

多喜が見ている方向へ同じように君影も視線を向けながら感想を

もらす。

君影の田につづっているのは、何の変哲もないただの殺風景な白い大理石風のタイルが敷き詰めてある廊下だけだ。そして人っ子一人いない。

「追いかけてみようか？」

「止めなさい」

多喜が聞き、君影が答える。

その様子を傍らで見ていた志智は飼い犬と飼い主の会話のようだな…と思つた。飼い犬が喋ることができたら、という前提での話だが。

「で、結局あの大量の本はなんだつたわけ？」

志智が聞いた。

人が埋まるほどの本を部屋に持つていたのにも驚きだが、今日この日に多喜は一体何をしようとしていたのだろうか気になって仕方がなかつたのだ。

「…ああ」

聞かれた多喜は話をまとめるための間を持った。

「シユティが読みたい本を探してて、見つけたところで安心して、寝た。本が大量にあるのは、普段から…？」

「つまり、普段から多喜のあの部屋は本で埋め尽くされていて、たまたま、シユティに頼まれた本を探してたら、眠くなつて雪崩起こさせてしまつたと」

色々条件が重なつたのだと、そういうことらしい。

「でもさ、多喜。お前、住む部屋とは別に図書室持つてへんかつたつけ？」

志智は疑問を口にした。

この島の観光大使役のこのグループは、普段撮影やなんだかんだと島に拘束されてしまう。いや、むしろ島から外に出る方が少ない。大きな視野で見てみると島に軟禁されているも同然、ということで生活に関する福利厚生はかなり手厚くされている。

自分の住む部屋以外に、自分の趣味を満喫できる部屋といつもの
が一人一部屋用意されているのだ。

君影は音楽を満喫できる部屋を、志智はミニシアターを、多喜は
図書室をそれぞれリクエストしめてがわれている。

趣味のものは大概その部屋に全部収まってしまうので、逆に生活
スペースにはそれほど趣味のものが散乱したりはしない。

「手狭になった」

多喜は完結に答えた。

「どんだけ文字ホリックなんや…」

唚然として答える志智。

「…そこは、英語変換しなくていいと思ひナビ

「ああ！ そうねー！」

(多喜にツッコまれた…)

「置いて行くぞ～七輪」

10メートルほど先から君影に声をかけられるまで志智は呆然と
立ちすくんでいた。

「だ～か～ら～！ おれを練炭炊く道具と一緒に発音すんのはやめ
い！」

「段取り八分つて言葉知つてますか?」

少年の澄んだ声が比較的大きな声で廊下に明るく響いた。
もう、目の前の角を曲がれば目的地、とこうとこうで、君影、志智、多喜の三人はピタッと歩みを止めた。

「こええ! 絶対白人の皮を被つた日本人だよシユティ…」

「なんという小姑や…」

「機嫌悪そう…」

お迎えもあと一人を残すところになつて、起きている人間を拾いに行くだけの簡単な作業のつもりだった三人は、予想外に入るタイミングの難しそうな場面に行きあつてしまつた。

シユティア・L・シユレーダー、年齢十四歳。同じくH・O・L・プロダクションに在籍する子供タレント。

通称シユティ。ふんわりくせ毛の金髪に大きな碧眼を持つ壁画の天使のような顔立ちの少年なのだが、彼は本来なら国の研究機関にいなければならないほど明晰な頭脳の持ち主で、ちょっととした家の事情があり、ここ日本の僻地でタレントとして活動している。

「シユティが並みの日本人よか流暢に日本語喋るのは今に始まつたことじやないやん君くん何いつてんの」

志智が最初に目の前の角を曲がつたら見えるであろう光景から田をそらした。緊張に耐えられなかつたのだ。

「この間、シユティの兄さんが『ドリフは日本のコメディアンの真骨頂!』って叫んでた…ような気がする」

続いて多喜も、志智の尻馬に意図的に乗る。

「ああ、そういうえば、あいつの家の執事も日本人だしなー。『志村』つて名前じやなかつたつけ、ケンさんケンさんつて呼んでる奴」

問題から逃げては駄目だ！ と君影の理性は叫んでいたが、君影も結局現実逃避の脱線に乗った。

「あ～そうじゃえば…、ヒテミさん志村つて苗字だったかも」多喜が、シユティの家の執事の下の名前をさらりと出す。シユレダ一家はイギリス貴族に名を連ねる家系で、シユティ自身、教育は兄の意向でアメリカで受けていたが、純粹にイギリス人だった。「ヒテミ？ 志村さんケンじやないのか？」

「ちょ、君くん今まで知らなかつたん！？ 一年も一緒にいて」

志智は爆笑しそうになつた自分の口を慌てて両手で押さえる。「志村にケンさんじやあ、あまりにもできすぎやろ～。志村さん、志村つて苗字だつたからシユティん家に雇われてんのや。親代わりのジヨシュアが親日家過ぎたのがシユティの不幸の始まりやな」口元を押さえ、必死に笑いをこらえながら志智は説明をした。「俺、ずっと志村さんはケンさんだと思つて疑つてなかつた！」あまりの衝撃に君影は三十秒ほど固まつた。

「いや、シユティの家の話はどうでもいいんだよ…。負けるな俺。シユティが白人の皮を被つた日本人だろうが、執事が志村だろうがそんなことはどうでもいい」

脱線が本格的になる寸前で、君影は立ち直つた。「問題は、誰がどうやって割り込むかだ」君影は真面目にそつ続けた。

「君くんさあ、お迎え係なんだから、ちやつちやとシユティに電話しちゃつて？」

速攻で志智に一蹴されてしまつた。

正直なところ、シユティはともかく相手をフォローするために出て行くのが嫌だつたのだ。シユティという少年は、貴族出身なだけにやたらとプライドが高い上にエゴも高いそして口も達者だ。しかし、それでも理不尽に相手を責めたりはしない。相手によほど腹を据えかねた、ということなのだろう、そういう相手を弁護しつつシユティから引きはがすのは、労力がかかる。

「おや、皆さんおはようございます、こんな感じでコンコンと向

をやつていらしたんですか？」

ところが、目の前の角から、シユティ本人がやつて来たのだった。

目の前に現れた少年、シユティは「コニコ」と笑っていた。

瞳以外は。

「シユティ、一体何でそんなに…」

怒っているんだ？ 君影が最後まで言い終わらないうちに、シユティがお手洗いに行つてきます、と言つて三人の前を通り過ぎた。シユティがトイレへ消えた後、また、目の前の角から大柄な中年男性がきょろきょろと何かを捜すような表情でこちらへ向かつて来た。

見たことのない顔だな、と君影は思つた。

「あ、おはようございます、シユティくんはこっちに来た？」

その人は言いながら歩きながら頭を下げた。

つられて三人も、おはようございます、と頭を下げる。

「お手洗いに行きましたよ」

「そうですか」

自分たちが三人ずらつと並んでいるせいなのか、居心地が悪そうにその男性は頭を搔くと愛想笑いを浮かべた。

「聞いていたんだろ？ 済まないね、怒らせてしまったようだね。

彼は、プライドが高いね」

はははつとその人は乾いた笑いを後に続かせた。

実を言つと、最初のシユティの一言以外は全く聞いていなかつた。

「さあ、あまり聞こえませんでしたよー、オレたち今来たところなんですね。すいませんね、プライドが高いのも商売のうちなんですか？ まあ、あんまり若いうちから甘やかすような環境に置いちゃいかんよ」

諭すような、それでいて上から目線の大人風を吹かすような言い

方だと感じた。

意外にも、多喜が一瞬空気を変えたのを君影は察した。

相手の男性のいい分に不服があるということらしい。

「まあまあまあ、制作側も大変ですよねー、上の許可をとらなきやいけない、タレントの『機嫌取りもしなきやいけない、視聴率もとらなきやいけないでホント苦労しますよねー』

なんとなく雲行きがあやしくなってきたのを感じて、志智がどうなすような口調で割つて入った。

「まあ、今日はね、この島の大事な日なんで、その日に免じてこの辺でシユティ貰つてっちゃつてもいいですかね？ オレたちお迎え係なんすよ」

志智は二コ二コと話を続ける。まるで、大げさなテレビ局の関係者のような口ぶりなのが、笑いのネタのようで少し滑稽だと君影は思つた。

「ああ、そういえばそうだね、聞いてるよ。入り時間に合わせて迎えが来るって、それ君たちだつたんだ。マネージャーが来るのかと思つてたよ」

「あはは、マネージャーは他にも仕事があつて大忙しなんですよ。自分たちができることは自分たちでやつていかないとね、ダメですよ？ 昨今のタレント事情は特に」

何が昨今のタレント事情は特になのだかさつぱり君影には分からなかつたが、相手は志智のいい分に大いに納得したようだつた。

「さすが志智くんだね、業界分かつてるね。お父さんがあのお笑い界の重鎮だからアレなのかな」

やはり、何がアレなのかさつぱり想像がつかなかつた君影だつたが、相手の機嫌が良くなつたのはなんとなく分かつたので、シユティがトイレから出て来たのをそのまま連れて行く許可を取つた。

笑顔で見送り、相手が元来た道を戻つていつてしまつたのを確認した志智は、急に真面目な顔になり、ポツリと言つた。

「なんか、変やな」

「ん？ 何が？」

「あの男、なんでこんな所にゐるの？」

「へ？ 知り合い？」

「いや、全然知り合いでなんでもないんやけど、あいつ、ちよつと前に問題になつたヤラセ番組のプロデューサーやないか…。それが、なんでシユティが出演するような番組作つとるんや。しかも、なんで、この式典があるよつた日に打ち合わせをわざわざ組んでんのやろ？」

君影は、確かにその疑問は自分も思つていたな、と思つた。

こんな時に打ち合わせを組まなければいけないほど、段取りが悪いような番組制作は、やはり、シユティの機嫌を悪くしてしまつのがもしかれないな、とも思った。

(1・1・2・3・5・8・13 …)

シユティはいらだちを押さえる為に数を数えていた。
フィボナッチ数列である。

この数列でることに意味はない、何でも良かつたのだ、素数だろうが、二進数だろうが、一瞬でも頭のなかで変換をする作業のものだったらなんでも良かつた。

が、それほど功を奏してもいなかつた。

怒りに固執することは愚かだ。それは理解している。しかし…。

「ムカつく！ あのプロデューサー！」

声に出してシユティは、トイレの洗面の水でぱしゃぱしゃと顔を洗つた。

最初にマネージャーから打ち合わせの話を聞いた時に断れば良かつたとシユティは思つた。

内容は決まっていない、撮影スケジュールは迫つてゐる、そんな状態で、シユティを呼んで、アイディアを出せ、意見が聞きたいと言つて來た。

せめて、完結している台本か、いくつか案があるならば、それを一枚にまとめた企画書を持つてこいといいたい。

それもない、あれもない、シユティくんはどう思つつか？
何も意見はない。

じゃあ、提案があるか？

こんな感じのいかがでしょう？

それは子供に分かるかなあ？ 君は高い所から物を見るね。

じゃあ、これはどうでしょう？

それはちょっとありきたりだね、天才君も意外と平凡なんだね。

じゃあ、ボクは不要なようなので、帰りましょうか？ それとも、何かお手伝いでもしましょうか、今日の会議は何をどこまで決めるのでしょうか？

今日は、そうだね、適当に。

日本人は、礼儀と段取りと季節を愛する国民性があると思つていてましたが、違つたようです、兄さん。

そこまで、一気に思い返すと、一度ため息をつき、トイレのドアを開けて外へ出た。

「あ、シュテイ」

多喜と田があつた。トイレのドアの前に居たのでシュテイはびっくりしてしまい無言で見上げる。

彼は、どうも起き抜けをつれてこられたらしく、茶色の柔らかそうな髪が少し重力に逆らつている。来ている服も、いつも通りの服装だ。

「はー、これ、渡そうと思つて」

田の前に、一冊の文庫本が差し出された。

薄いオレンジの紙に「天文対話」と、表紙に感じで印刷されている。

シュテイが日本語で是非本で見たいと思つていた本だ。絶版になつたと聞いていたが、やはり多喜のところにはあつたようだ。

「ありがとうございます！」

シュテイはちよつとうれしくなつて、笑顔で答えた。

「じゃ、いくぞー。忘れものないな？」

頭の方で、君影の声が聞こえた。

「はーい、何も持つて来ていません」

シュテイは答えて、歩きだした。

木立の間を君影たちの乗った電気自動車が滑るように走つて行く。行き先は行楽エリアの公園だ。

「今日は、ロケバスで着替えとメイクで、会場は野外設営だから、スタッフバスを持ち歩くようになってお達しだ、志智ダッシュボードの中の奴配ってくれ」

君影に言われて、助手席の志智は自分の田の前のダッシュボードから取り出し、多喜とショーティに配つた。

君影は運転中なので、志智が君影の分も預かる。

ショーティにバスを手渡す時に、志智はふと思つたことをショーティに聞いてみた。

「なあ、ショーティ。わつきの打ち合わせって、ちやんとマネージャー経由で来た仕事なん?」

バスを受け取りながら、ショーティの機嫌が一気に急降下したことが分かつた、志智に笑顔を向けてきたからだ。

「ええ、昨日の夜に、マネージャーがどうしても断れなくてつて電話かけてきましたよ。その点が、不審といえば不審なんですけれども、気の弱いマネージャーのことですし、押しの強い人に負けてしまつたんでしょうね」

ショーティは答えながら、車の窓の外を眺める。

「そつか、マネージャー経由つてことは、ちゃんと事務所通してんやな」

志智は、独り言のように口に言しながら前に向き直つた。

「この島の局内にいるつてこと 자체、ちゃんとした筋を通じてることじやねーの?」

君影は、志智が何をそんなに気にしてゐるのか分からぬといつた

風情で話に割り込んで来た。

「そ、うなんや、それが腑に落ちんのや。なんで、あんな奴をこの島に入れたんだろうつて気になつてな」

「この島は大きな転機を迎えるようとしている。

レジヤー施設、研究施設などをクリーンエネルギーで運用し、その実際を、訪れた客が体験する。もちろん、もう何年も前から、研究所やテレビ放送のシステムは運用されている、だが、今日からはそこにレジヤー施設の営業が始まる。島が目指した最終形態になるのだ。全国の注目を集めている中、問題を抱えている要因は少ない方が良い。そんな時期に、テレビ業界を追われたような人物を島に入れる愚を、誰が犯すというのだろう。

「事務所の承認がない打ち合わせはボクはしないですけれども」シユティイが、話し始めた。

「今日の打ち合わせの内容は、とてもじやないけど、打ち合わせと呼べるものじやなかつたですよ、企画自体の案を出す程度のものでした。しかし、撮影は来週からだそうです。多分、あの企画は撮影が実際に始めることができないでしょうね」

意味がない、意味が分からなくて、振り回された徒労だけがシュティに残った。

何でこういうことになったのかすら、自分に情報がないために追求できず、朦朧のように溜まったストレスが自然消滅するのをシユティの中ではっている。

「志智が言う通り、何か変なところはあるけど、情報がないものを気にしていても仕方ないからな、とりあえず、後でな」

君影は電気自動車を停車させた。

「さ、行くぞ」

君影は他の三人を促し、車をロックする。

「へいへーい」

「うす」

「仕方ないな、あーあ」

口々に返事をして、君影、志智、多喜、シュテイの4人は口ケバスへ向かつた。

「すごーい君影くん時間ぴつたりじゃない！」

口ケバスに着いた四人は一人のヘアメイクと一人の衣装担当のスタッフに迎え入れられた。

「そりゃもう、慣れていますから」

三人のスタッフの拍手に君影は片手を上げて応える。

君影に続いて、志智、多喜、シユティと入っていく。

「さあ、一気に仕上げるわよ～！」

最初に声をかけた女性スタッフがそう声を上げると、口ケバスの中は戦場のような空気が生まれた。

「はい、多喜くん！ 芸能人の顔になつて！」

多喜は、化粧水のパッティングでびしひと叩かれた。

「シユティくんは今日はちょっと険があるわよ！ はうい天使顔！ シュティは強制的に顔をマッサージをされた。

「大きい」一人組は先に着替えて！

多喜と一つしか違わないんやけど… と不満を漏らしつつ志智は着替えに入る。

「パワフルだね～、異羽さん、いつもながら」

そう君影は衣装担当のスタッフの男性に声をかけると、その男性は「肉食系女子つて奴ですかね」と苦笑した。

「馬刺に焼酎とか似合いそうやもんな異羽さん」

志智もそれに乗つかると。

「それ、私の好物よ！」

異羽さんと呼ばれているヘアメイクの女性はそう応えると豪快に笑った。

口ゲバス内に和やかな笑いが起こっている頃、エ・オ・レプロデュースの観光大使メンバー最後の一人、神鳥ルイの周囲は緊迫した空気に包まれていた。

「お嬢様！ 申し訳ありません、操縦不能です！」

島の上空約700メートルでパイロットの絶望的な声を聞いてしまったのだ。

スカイダイビングを楽しむには高度が足りないな、と反射的にルイは思った。

いやいや、高度が100メートル以上あるのだからパイロットになんとか軟着陸に頑張つてもらうのが筋なのだろう。島にさえ近づかなければ、回りは海ばかりだ。

ルイと一緒にヘリコプターに乗っていたお嬢様と呼ばれた女性は、その報告に形の良い鼻を鳴らして口をゆがめただけで、取り乱す気配はない。

胆のすわり方が尋常ではないのが、朱鷺羽静香が朱鷺羽静香たるゆえんである、とでもいうかのような落ち着きぶりで、むしろ、パイロットの方が取り乱してしまっている。操縦桿をがちゃがちゃと動かし、「どうしたらしいんだ！」といった内容の言葉を叫びながら慌てふためいていた。

これでは、助かるものも助からない。

困ったな、とルイが思った時、予告なく静香が自分のシートベルトを外しにかかりた。

「ルイ、落ちる前行くわよ」

まるで、停車中の車から降りるかのような気軽さでルイを誘つた。ところが、ルイが「はい」と応える前に、今まで取り乱していたパイロットが豹変した。

「おつと、助かってもらっちゃ困るんだ」

手にはナイフを握つている。

弱つたな、とルイは思った。

静香は、しばらく無表情のままナイフを握つたパイロットをまつ

すぐに見つめていたが、やがて、大きくあでやかに笑った。

思つてもいなかつた表情に「え」と虚をつかれたパイロットは、おもむろに静香が自分の脱出用パラシユートをナイフの切つ先にて、そのまま押してくる力にのけぞつてバランスを崩してしまつた。ルイはその隙に、自分もシートベルトを外し、パラシユートを背負い、静香を自分の腹にくくりつけタンデムジヤンプの体勢を整えた。

静香が扉を開くのを助ける。

体勢を立て直せない暗殺者のヒステリックな笑い声が後ろから聞こえる。

「そのパラシユートは開かないように細工してあるんだ、さようならだなお嬢様！」

その声を振り切るかのように、ルイは「行きますー」と声をかけ、ヘリコプターから飛び出た。

すみません、あなたを信用していなかつたわけではないのですが…。

ルイは、心中で暗殺者に豹変したパイロットに詫びた。

数秒後、パラシユートは見事に開いた。

(自分で使用するものは自分で管理、が基本な職業なものですから…)

神鳥ルイ（かんどり るい）、年齢二十三歳。エ・オ・レプロダクションに在籍するモデル。

褪せた金髪に静かなブルーグレーの瞳を持つ日仏混血のショーモデル。

趣味は、スカイダイビング。趣味が高じてインストラクターの資格も持つていて、徹底した自己管理をモットーとしているため、本日も自前のパラシユートを持ち込んでいた。

「なんや…、えらい様子がオカシイやんか」

最初に戻る。

白を基調に燕尾服か学生服か何かをモチーフにした未来的なデザインの衣装へ着替え、それぞれ、メイクを施された四人は、入り口を固める警備員にバスを見せ、セレモニー会場へ勢い良く足を踏み入れた。志智が急に立ち止まり、きょろきょろと会場内を見渡す。何故か、会場の中が閑散としつつも、奇妙なざわめきに満ちていた。

「ああ、そうだな」

続いて入つて来た君影も、普通、セレモニー会場というものは、式典が始まる前から人がぽつりぽつりと集まり始め、開始10分前には大体定員になつており、所定の位置へ立つてているか座つてしているかして いるものだと思つていたのだが、現在、開始15分前であるにもかかわらず着席する様子がない。

そればかりか、見つける人、見つける人ほぼ全員が厳しい表情で携帯電話でどこかと連絡をとつて いるようなのだ。

他の客はとくに、一様に会場の入り口付近から港の方を見ている。

まるで、大きな犯罪現場か事故現場に出くわしたみたいな様子だと君影は思った。

「…あ…」

志智と君影が立ち止まつたのに合わせて、背後で同じように立ち止まつた多喜が人差し指を中央にあるカーテンで閉じられたステージへ向けた。

「どうした? 多喜」

三人の視線が、多喜に集まる。

「…マネージャー、あわー」

言葉少なに告げると、歩みは無理でわざと歩を止めてしまつ。

「おおー、多喜ちよい待ち~」

すかさず志智が声をかけたが、歩みは止まらない。

「とりあえず、マネージャーに状況を聞いてみましょーか。何か異変が起こっているのは確定なようですし」

君影と志智の視線の範囲外の下方より、ショーティの不機嫌な声が一人を促した。

「…ショーティ、まだ怒ってるんだ?」

「こうこう、段取りが悪い状況が嫌いなだけです。全く、あのマネージャーは何をやつてるんですか」

ショーティが君影の下方からキツイ眼差しを向けながらやつと言つと、ふいつとこう擬音が聞こえそうな踵を返したので、怒つてゐるんだな、と君影は思つた。

「沸点が低くなつてんなあ」

肩をすくめながら志智はショーティを見送ると、君影へ面白い物を見たといった風情で感想をもらした。

「ちょっと息子の様子がいつもと違つかりつて、そんな過敏にならんでもええんぢやう?」

志智は気にしてゐることないでえ、と君影の肩をぽんぽんとたたいて多喜とショーティの後を追つた。

過敏になつてゐる?

志智にそう指摘された君影だったが、君影自身は、珍しくショーティが不機嫌さをあらわにしていることが気にかかるのではなくて、「そうじやなくて…」 そつではなくて…、なんだらつ、言葉にならない引っかかりを感じてゐるのだった。

(なんだろう、なんか、変なんだよな、ショーティ関連のこと、なんか変…な気がする)

喉元までその引っかかりが出かかつてゐるのに言葉にならないもどかしさが気になつて、君影は誰かとぶつかりそうになつた。

「…うわっと、つとスイマセ…、パンダ？」

化粧が施された頬に、毛が一瞬もふつと当たる。

それはよほど急いでいたらしく、君影が気がついたときは、既に振り向かないと確認できないところまで遠ざかってしまっていたが、律儀に「気にするな」と後ろ手に片手を振っていた。

「パンダの着ぐるみじやねーかよ、おい」

君影は唖然としてしばらくパンダの後ろ姿を見送ってしまった。

君影がマネージャーの元へたどり着いた時には、既に険悪な雰囲気が漂っていた。

マネージャーを囲み、皆一様に眉をひそめている。

「遅れてしまん。なんだかパンダがいたぞ、会場内に」
セツキ多喜が見たパンダの着ぐるみと同じだろうか？ と続けようとしたのだが、「後にしてください、君影」と、シユテイに遮られてしまった。

「どうした、なんかあつたのか？」

言いながらマネージャーを見る。

「あ…、あの、…あの」

マネージャーはたゞたゞしさに輪がかかった状態だった。何か問題があつたようだ。

「ショックを受けているのは仕方ありませんが、もう一度ちゃんと話してもらえますか？」

シユテイは静かにだがいらだつた口調で、マネージャーに話しかけた。

君影は、自分がいない間にもたらされた情報をすぐにでも知りたかつたのだが、口を挟むべきではないな、と思つて黙つていた。

マネージャーがこれほど動搖しているということは、自分たちに関係ある部分で何かがあつた、というのは想像に難くない。

今現在、何事もなく志智、多喜、シユテイ、マネージャーがここにいるということは、少なくともそれ以外、機材、舞台、他の出演者…もしくはルイとお嬢に何かあつたのだとすると…。

そこまで、考えて君影ははっと会場の入り口の方向、そして、空を見上げた。

会場に入らざ、皆、何をしていたのか？ それは、お嬢とそのHスコート役のルイが乗ったヘリコプターに何かあつたということなのか？

「なあシユテイ、へりつてビリヤつて飛んでるんだ？」

空を見上げながら、君影はシユテイに聞いた。

「飛行機と同じですよ」

シユテイはマネージャーから目をそらす間に答えた。

「なあ、へりつて何で飛んでるんだ？」

君影はなおも聞く。

「簡単に言えば、ベルヌーイの定理です」

「もつと簡単に説明しろよ」

君影とシユテイのやりとりが段々早くなつていいく。

「翼により揚力を発生させて飛んでいます。飛行機は自らが動くことによつて揚力を発生させていますが、へりは羽を動かして揚力を発生させているんです。シンプルな話でしょ？」

シユテイも無表情に答える。

「わっかんねーな、簡単に落ちるのか？」

「割と簡単に飛びますし、割と簡単に落ちます」

「どうやつたら？」

「揚力を失えば」

「どうやつて？」

シユテイがピタッと答えるのを止めた。

マネージャーから視線を外し、君影の目を見た。

「…操縦不能だそうですよ」

やつとさつきから聞きたかった回答が得られたのだが、それは最悪の想像を確定しただけだった。

「マジで？」

見つめ返した水色のビー玉のような瞳が真剣だった。

「連絡手段はありません。無線の交信も途絶えたとのことです。… そうですね？」

シユティはマネージャーへ確認をとる。マネージャーは何度もうなずいた。

「なぜ、そうなったかという原因については、情報がまったくありませんし、今、その話を追求したところで事態が何か好転する」ともないです。

ヘリに関して、ボクたちに何かできる」とはありません。ヘリのパイロットカルイの判断に期待するしかありません

「あとは神頼みだな」

「神頼み…、そうですね、静香の強運を感じましょ」

静香、と聞いて君影は我に返つた。

もし、静香が死ぬような事態になつたら、死ぬにはいたらなくとも、もし、ヘリがどこかに不時着して定刻通りに式典が始まられないう事態になるのだったとしたら…。

「まずいな、この場をどうやって収めたらいいんだ」

シユティがやつと気がついたかといった表情で君影を見た。

「その手段を考えるために、さつきからマネージャーに尋ねているんですよ」

手段を講じるためこ、マネージャーに尋ねる。

手段をマネージャーに尋ねる、ではないところが、ここでの恐ろしいところだ、と君影は思った。
誰かのせいにしない。

庇護されているだけの少年ではなく、自立した人間なのだと、こういう時に実感させられる。

「で、ショティは何が聞きたかったんだ？ 時間ないぞ」

「The show must go on がどうかが知りたいんです」

ショティは、こめかみに人差し指をあて考案した仕草をした。

「ああ、そゆこと」

志智が、納得した。

「なるほど」

多喜が、うなずいた。

ザ・ショーマスト・ゴー・オンとショティは言った。

君影自身もQUEENの有名な曲のタイトルになつているくらいの言葉なので意味は分かった。

ショーは続けなければいけない。一旦始まった舞台は何があつても止められない。この式典というショーを始めるのか、そして続けるのかどうか？ ということだ。

今日の式典が成功するか、失敗するかで、この島の命運が決まる。自分たちは、もつ既に一年前から自主的に今日の式典のためのレールに乗っている。君影は、一度掴みかけたチャンスを逃した、再度目は逃したくない。このショーが続行可能な限りなんとしても続けたい、そう思った。

「操縦不能になつて、いたと判明した時には、まだプロペラは回り続けたのかどうかが聞きたいです」

シユテイの中ではいくつかのシナリオができ上がつてゐるらしい。そのシナリオの分岐点となるところが、「プロペラは回り続けていたのか」なのだろう。

「マネージャーどう?」

「…分かりません」

か細い声でマネージャーは答えた。

「分からぬじやなくて」

シユテイが声は荒げはしないものの、きり立つ。なるほど、これで時間がかかるつていたのか。君影は、シユテイを制した。「分からぬのは分かつた。じゃあ、音は? すぐ、墜落するよつな話しをしていたか?」

「…してこません。音は、なんだかうたかつたです」

「じゃあ、すぐこは墜落しない可能性もあるつてことだな?」

君影はシユテイに田配せをする。

シユテイは無言でうなずいた後、喋り始めた。

「通常、その状況であれば、パイロットはなんとしてでも軟着陸を試みるでしょう。ですが、静香の性格を考えると、しばらく揚力が保てる状況なのであれば、大人しく軟着陸を試み救助を待つ、とう選択をするとは思えません」

「ルイも連れてるしな~」

志智が言った。

パイロットが止めて、ドアを開けて出て行つてしまつたが、そこにはいる誰もが思つた。

「会場の状況から推測するに、マスコミはへりに異変があつたことを既に報じてはいるはずです。なので、それを逆手にとりましょう」「…え、でも、そんな、むちゅくつけな。それに、もし、脱出していなかつたら…」

マネージャーが口を挟んだ。

シユテイはにっこりと微笑んだ。

「大丈夫ですよ、静香は」

「まあ、むしろ、自分が来たときに用意が整つてない方がキレられるよなー」

君影もシユテイに乗る。この仲間だつたら乗り切れる、そう純粋に思った。

前はもっと自分が引っぱつていかなくてはいけない責任感で張りつめていたのにこの気楽さはなんだろうとも思った。

「そやなあ、『アタシが死んだつてやり遂げなさい！』くらいの

ことは言つわな

志智もちやかして言つた。

「じゃあ、どうする？」

「サプライズで映画の撮影といつことでお願いします」

「堀ちやんがよつと話があるんすけど」

君影は、舞台袖にいた舞台監督を呼び止めた。

「よつす君影、なーんかお嬢のへり事故つてるんだつ…」

事故つてるんだつて？ 全部言じ終えない内に、君影はあわてて堀ちゃんと呼んだ舞台監督に飛びついて口を塞いだ。

「やだなー堀ちゃん、映画の撮影やつてんだつてこないだ飲んだ時言つたつしょ？ 忘れたの～？」

袖にいる皆も誤解しないよつたよね、あつまはははは…。

（あああ、スゲーわざとらしこなオレ…）

君影は満面の笑みで、回りの出演者にも愛想を振りまぐ。

わざとらしこと分かつていても、今はそのまま押し切るしかない。

堀は君影のライブで必ず舞台監督として入つてるので、君影とは顔見知り…というか、飲み友達だつた。

周囲に愛想を振りまきつつも、堀とスクラムを組むよつな形で肩を抱き寄せて小声だが怒鳴るよつに話しかける。

「ちょ、ちょ、ちょっとさあ、堀ちやん頼みがあんだが。お嬢事故つてるよつじいんだよね」

「何、マジかよ、やつきたから中継入つてんの本当の話なのか！ 全然こいつまで指示回つてこないかひげ、ちよつと困つてたんだつつの」

堀も同じよつて喋り返す。

「オレもさ、やつきたから、どんな中継入つてんのが、オレ実は知んねえんだけど、でもさ、墜ちたとか言つてねえだろ？ 多分」

「確かに言つてねえな。で、どつすんの、止めんの？」

「こやこや、お嬢怖えからやるやる。でも、なるべく段取り変えな

「ようつにやるけど、報道入っちゃつてからフォロー入れよつて話になつてんだ」

「まあ、暗じとこでやるワケじゃねえし、なんとかすんべ。で、何、映画撮つてるんで事故つてるよつに見えても事故つてないでーす、とかつて苦しい言い訳すんの？」

「簡単に言えばそんな感じ、志智がそれで時間稼ぎするから、その間にお嬢が多分空から降つてくるつて」

「何それ、パラシュートで降つちゃうんだ？ 確実な話しなワケ？」

「シユティの予測つすよ」

「あ、じゃあ了解。シユティがGO出してんならオレ乗るわ」

堀は自分の腕時計を見る。話が見えれば十分だつた。舞台セットの位置の変更とトランポリン位置の変更を素早くインカムで伝達する。

「そこまで並んでしていいのかよ」

「あいつと一ペんちやんと話してみる～？ わ前よりよーつぱりしつかりしてんぞ～。じゃあ、両横に設置してた滑り台を面側に向けて、トランポリンを舞台の奥側に設置しといてやるから、そこにお嬢を投げてもらえ。そこ以外に降りるんだつたらちやんと降りられるだろ～からオレは知らん。あ～今からだと…予ベル本ベルなしで、定刻になつたら志智がスタートつて感じか…。通常の段取りに戻るまで何分だつて？」

「十五分」

「十五分ね、了解」

「サンキュー堀ちゃん、シユティに伝えとく」

「つこつこ、今度お前のおじつどよる～」

お前は一体いつシユティとちやんと話したんだよ堀ちゃんよ…。

君影は、三十路を過ぎたまばら無精髭のおっさんと十四歳のシユティがちやんと話しているところを想像しながら走つた。

(どう考へても犯罪ちつくな絵面にしかなんねえつて… 面をつけろよおつさん…)

サファイアの瞳を持つ我が島「イオフロート」。

緑に囲まれた八角形の深い青色は、セントラルオクタヴィアン揚水発電所。

天気の良い日に空からこのセントラルオクタヴィアンの池を眺めるのがとてもお気に入りだ。

こんなに綺麗なのに、電気を作れるなんてホントにお得だわ。

セントラルオクタヴィアンは、余ってしまった電力により海水を吸い上げ、必要な時に吸い上げた水を落とすことで発電するという揚水発電所なのだが、そんなところにお得感を感じてしまう静香をシユティの兄のジョシュアはいつも「日本人つて無駄が嫌いだよね。二つ以上の機能がないと満足してくれないんだ」と笑う。

「そりゃそうよ、私はあたりまえなことをするために生きているわけじゃないんだから」

と、静香はジョシュアの悠長な物言いを一蹴する。

一つの物が一つの機能を果たすのは当然のことであって、そこに付加価値がつかなければ静香の興味は惹かれない。

ただ生きているのであれば、虫でも植物でも持っている一つの機能だ、生きる機能以上に思考と感情を持つ人間だからこそ、一つ以上の機能を持つものに関心を持つことができる。人間が生きること 자체が多機能さを求めている、と静香は思っていた。

人間の一生は短い。人間として生を全うする時間の中で精一杯たくさんのこと樂しみつくしたいのだ。

「樂しまなきや損だわ」

自分を殺しに来た人間に会った、その瞬間をどう生きるか、生き延びるかを考えるのも楽しかった。

今、島へ降りて行く瞬間も、島や海の綺麗さに圧倒されるのが嬉しい。
この空気抵抗を感じるのが楽しい。

次に地上に降りる瞬間も、降りた後のこと、その時にどうなったのか知るのが楽しみで仕方がない。わくわくする。
一秒一秒生きていることを楽しみたい、またそれが楽しい、それが朱鷺羽静香という人間だった。

おれの芸能人生これで終わりか〜？

呼べル本ベルなし、段取りなし、台本なし、全部アドリブでつてホントにむちゃくちゃやなあ、本来の段取りにつなげるのも自分やし、しかも十五分必死でつないでも、もしかしたらお嬢はこないかもしぬない。その時はその時で、お嬢がいなままで、進めていかなくてはならない。

The show must go on の鉄則なのだ。

一度始まった舞台は続けなくてはならない。

(ホントに無茶すぎる)

志智は、腕時計を確認する。
あと五分。

時間は刻々と迫つてくる。

なんで、こういう日にハプニングが起こっちゃうかな、普通こんな大事な日は念には念を入れて失敗のないようにするもんちゃうんか、一年も前から決まってるよつな式典には…。

志智は走馬灯のように一年間の道のりを振り返る。

お笑い芸人の大御所という普通の生活を送るには困るよつな父親を持つ環境の中、父親の影響を受けないように受けないように勉強も頑張り国立大学にも受かつた、見てくれも爽やかさや清潔感に気を配つて頑張つてきたにもかかわらず、いざひょんなことから芸能界へ入ると、自分にはお笑い芸人の道しかなかつた。しかし、朱鷺羽静香という人は、お笑い芸人だけではない道も示してくれたから誘いに乗つてみたのだ。

一年間、確かにお笑いだけではないアイドルとしての仕事があり、芸能人という範疇から外れるようなレッスンもあつたりはしたもの

の、結構順風満帆だと思っていた。

今日までは。

(今日「ケたらなんにもならへんのや畜生)
なんとしても乗り切らなくてはならない。

「せめて、出る時になんかいい感じのジングル入れてくれよ~」
ええいままよ。と踏ん切りをつけ、志智は舞台上に上がった。

『イオトラストプレゼンツ アメージングランド営業開始記念式典
へようじやお越し下さいました! アメージングどつたり企画は十分に放送してくださいましたか?』

港から公園にかけて、といふびこの配置してあるモニターが一斉に志智の姿を映し出した。

時間になつたんだとショティは思った。

志智は、謝辞を述べながら自分の背に隠していた急いでいたの「どつきりでした!スマセン!」と書かれている手持ち看板を出した。

ショティの回りにいた招待客や報道関係者は、そのモニターから流れてくる言葉に一斉にとまどいの声を上げている。

『さてさて、大いに驚いてくださいた皆さん様子を見てみましょう~!』

モニターの中の志智はそういうながら携帯電話を操作している。
すぐさまショティの隣にいた多喜の持つ携帯電話が振動を始めた。
多喜が通話ボタンを押す。

『港近くに我らがメンバーのショティと多喜に一番驚いてくださいた皆さんを取材してもらおうと思います。現場のショティと多喜~?』

志智がいい終えると、モニターは画面の半分が多喜の持つ携帯電話の画像へと切り替わった。正確にいうなら、志智の持つ携帯電話と多喜の持つ携帯電話がテレビ通話をしている画面に切り替わった。

多喜が携帯電話のカメラでショーティを映している絵だ。

逃げやがつたな志智。心の中でショーティはつぶやいた。

もう少し向こうで頑張るかと思っていたのだが、志智は挨拶が終わるや否やショーティに振ってきたからだ。

「はーい！ ここはアーディングランドの玄関口、ポートアイアンシティーンです。実に多くの人がこちらにいらっしゃりますよ志智くん！ 会場内は閑散としてるんじゃないでしょうか？」

もしそうだとしたら、賭けはボクの勝ちなので、志智くんに七三分けになつてもらいつつ、取材をしてみたいと思います」

ショーティはにこやかに多喜の持つ携帯電話のカメラへと手を振った。

『ちよ、ショーティなに言つてんねん！』

画面の半分の志智が聞いてないよとリアクションを起す。

そこへ、悪い笑みを浮かべた君影がクシとワックスを持つて登場した。

「やまーみる」と思いつつも純真な笑顔を浮かべながらショーティは顔に似合わず流暢な日本語で喋り始める。

「ボクたちは一年前から、このイオフロート島の観光大使として宣伝に努めて参りましたが、その集大成ともいづべき今日は、皆さんに驚きと興奮と更に今後のアトラクションとコラボレーション予定の映画の一部になつていただこうとのどつきりを計画しました。

現在、上空ではイオトラスト代表の朱鷺羽静香がプリンセステンゴーをながらの脱出劇を演じております。ヘリコプターからダイブした後、無事会場までたどりつけるかどうかは「見じる」ということで…。

あ！ 今、みなさん見えましたか？ 上空にパラショートが見えます！ こちらに向かってきます！」

モニターの中の君影と志智も、え？ といつ表情で空を見上げる。

「ボクの計算では、もつあと五分程で会場へ到着する予定ですので、こちらにいらっしゃる皆さんには会場へ向かわれた方が良いかと

思われます」

シュテイは「どうですか？ 感想は？」などと適当に話しかけながら、港付近にいる人間たちを会場へ誘導することに成功した。

パラシユートは見つけたとたん、どんどん近づいてくる。数は一つ。

お嬢かルイのどちらかか?

君影はそう考えて、どきつとした。

さつき話した堀の顔が浮かんだ。

近づいてくるパラシユートをよく見ると、一人が重なっていることが分かった。

二人ともいたことにほつと安堵した。

これで、先ほど堀が言つたように、場合によつては静香を舞台奥のトランポリンに落としてもらつことができる。

田は上空のパラシユートから田が離せない。

しかし、頭の奥では、先ほど堀とのやりとりが浮かんでいた。

舞台袖で段取りの変更を相談した時、堀はなんといったか?

「じゃあ、両横に設置してた滑り台を面側に向けて、トランポリンを舞台の奥側に設置しどこでやるから、そこにお嬢を投げてもらえ」と言つたのだ。

なぜ、堀は、お嬢が投げてもらえる状況だと断言できたのか?

そう疑問に思つてしまつと、もうダメだった。

じゃあ、なぜ、トランポリンを最初から使うセットだったのか?

なぜ、配置を変えれば滑り台として機能するセットなのか?

なぜと考え出したら際限なく疑問がわいてくる。

だが、パラシユートは君影がそう考えているつむじ、すぐ近くまで降りてきていた。

「舞台を通り越すかな」

この間にか舞台上にいたシユティが、ボソッとつぶやいていた。

シユティの言つ通り、会場の入り口の手前では降りる」ことができなかつた。

「多喜、静香がトランポリンに落ちて跳ね返るのにタイミング会わせて姫抱きで拾つてきて」

シユティは更に、小声で多喜に指示を出す。

結構無茶な話だな、と君影は思つた。

特に、パラシユートを田の前にしている今となつては。

「大丈夫ですよ君影、静香の衣装は特殊なライダースーツに耐ショックのパッドが入つていますから、多少の衝撃では怪我だつてしません」

多喜に指示を出したついでに、シユティが「」と君影に微笑みかける。

遠田には、喋つてゐるよつとは見えないだろ？

君影は、自分がそんなに心配そうな顔をしているのだと思つた、理由は、違つたのだが。

「あ、いや」

一瞬訂正しかけて言葉を飲み込む。今はそんな話をする時ではない。

そういうしている間に、いつの間にか、静香はぴつたりとしたライダースーツのような衣装をまとつた身体をまるで体操選手のように使いためらいなくトランポリンの上へ落ちていつた。

次に君影が静香を見たのは、多喜に抱きかかえられ、セットの上まで飛び上がり、舞台上の滑り台状になつたセツトを滑り降りくる様だつた。

多喜がボディーガードみたいだな、と君影は思つた。

案の定、多喜に事情を耳打ちされた静香はこつとつた。

「映画のタイトルは『ボディーガードはサイボーグ』、春日多喜のお姫様は一般公募ですので、ふるつてご応募くださいね」

確かに、多喜の運動神経は人間の範疇から逸脱している。しかし、ひょうたんから駒とはこのことだ…と君影はどうと疲れを感じ

た。

「やつと終わった…」

白煙のバスルームで以前ルイから貰ったアロマオイルを湯船に適当に垂らす。

君影は、はあといふため息とともに湯船に腰掛けた。

充満する湯気にアロマオイルの香りが頭の奥の疲れをほぐしていく。

式典に遊園地内のアトラクション取材それからレセプション、ただそれだけの予定だったのだが、余計なことが多すぎた。シユティの不可解な打ち合わせ、静香のヘリコプター事故、あわや式典は中止かと思われたが、シユティの機転により表向きには式典は無事に終わった。

無事に終わつてみると、なぜあんなことになつたんだろうと氣になりはしたもの、無事に終わった安堵感が強過ぎて頭の中で情報が整理できぬ。

（なんだか、変なパンダの着ぐるみもいたしな～）

式典会場でぶつかつたパンダの着ぐるみ。

（会場に遊園地側のスタッフって入れたつけか）

式典の打ち合わせの時に、スタッフの入場制限についても聞いた気がするのだが、もう忘れた。

思つたより疲労しているのを君影は感じた。

「考へても無駄無駄、頭ハゲちまわ～」

君影の携帯電話がちゃかちゃかと鳴った。マネージャーからだ。「はいはい、どしたんすか～？」

湯船に浸かりつつも着信に応じる。

『お、お休みのところ、す、すみません！　君影くん、静香ちゃんよ、上の会議室へ来るよう、い、言われまして』

「誰は？』

『シユ、シユティくんとルイさんは、お、お揃いになつてこます。

ほ、他の方々にも連絡したので直にいらっしゃるかと……』

「はいはい、じゃあ、俺も行くわ～』

返事の最後はあぐびになりながら通話終了ボタンを押すと、手早く着替え会議室へ向かった。

会議室のドアを開けると何かが頭の上へ降ってきた。

「うわっ、何だ？」

「やつた、でかしたシュティ上手く頭に挿さつたで」

志智がガツツポーズをする。

「これはまた、見事に挿さりましたね」

ルイが苦笑する。

「君影の背だと大して速度が出ないから挿さるかどうかわかんなかったけど、うまくいったね」

手に白い風車を握っていたシュティはビビりなく興味がなさげな口調で言った。

多喜は無表情に拍手をしている。

「犯人はお前か志智！」

各々の反応で犯人を特定した君影は志智に詰め寄る。

「あはは～！ 扉開ける時の無防備さを戒めんのや～」

「志智も引っかかるたんだけどね～」

シュティがニコニコと言う。

「結局、多喜と志智と君影のうち多喜だけが避けられたね、ルイ」

「そうですね、賭けは私の勝ちですね」

にこりとルイが笑いながら言つ。

「うーん、君影は避けるかなって思つてたんだけどな～。意外と鈍い？」

「お前らが黒幕か！」

君影は志智に詰め寄つたままシュティとルイの方へ顔を向けた。

「黒幕だなんて言いがかりだよ君影、純粋にボクが犯人。ルイは帮助くらいかな。犯人っぽい仕草の人人が犯人だとは限らないよね。も

う少し冷静に状況を分析しないと、ホームズにはなれないなあ残念

「念」

シユテイはさも残念そうな悲しそうな顔を作った。

「何が残念だ、開き直ってんじゃねーよ、ルイだって賭けに乗つて
んだから帮助じやねーよ共犯だつの」

「まあまあ、そんないきり立たんでもええやん、頭の風車取つて椅子
子に座るわ君くん」

志智が君影をなだめる。

「何、そんなもんが！？」

君影はあわてて、頭をさぐり風車を取る。

白い紙で作られた風車が、割り箸頂点に地面と平行になるよう
に画鋲で留められていた。

「何だこれ、風車つて普通こんな留め方しねーだろ」

君影は、画鋲で留められている風車を割り箸の側面につけ直した。
「うん、別に風車を作りたかったワケじやなかつたけど、あるもの
でちょっと試したかっただけだから」

シユテイがぽつりと言つた。

「何を？」

「ヘリの事故について」

「何が分かつたのか！」

君影がシユテイに勢い良く問う。

「今日は島の稼働の仕上げの日のはずなのに、全体的にすつきりし
ない日でしたよね」

シユテイは急に口調を改め、君影の勢いを殺すかのように唐突な
話題転換をした。

「お…、おう」

君影はシユテイの言つことへは同意なのだが、困惑につつ返事を
した。

志智も多喜もそれに思い当たる節があるので、黙つてうなず
いた。

シユテイの急な打ち合わせ、着ぐるみのパンダ目撃、舞台監督の堀の言動、仕上げはペリの事故、それらがなければ今朝のすつきりとした気分のままで今日が終われたはずなのだ。

「ペリの事故の実験に風車はなんの役にも立ちませんでした、手持ち無沙汰で始めたことだったのです問題はないんですね」

シユテイの口調が明るくなつた。

「何か分かるも何も、ルイから話を聞くといいですよ、凄く素敵なニュースが聞けます」

急に話しを振られたルイは、困ったような微笑みを浮かべた。

「簡潔に言つと…」

ルイの言葉に君影、志智、多喜の三人は息をのむ。

「殺されました」

「何やの、その素敵すぎるニュースは…」

「簡潔すぎだろ…おい」

「聞きたくなかった…」

今日の式典をフォローするために全力を尽くしきってしまった志智、君影、多喜が三人三様に疲れきつた口調で驚きを口にした。「つまり、何、事故じゃなくてルイとお嬢の殺人未遂事件つてことなんやな」

いち早く立ち直った志智がルイとシユテイを交互に見比べながら確認した。

「主に静香さんの殺人未遂で、僕は多分巻き添えだと思います」「やんわりとした口調でルイが答える。

そういう問題ちゃうわとすぐさま志智に突つ込まれた。

「じゃあ、今呼ばれてるのは、口からでまかせ多喜主演の映画制作をどうするか会議じゃなくて、安全対策会議なのか」

どこか合点がいった口調で君影も確認した。

シユテイはそれに対してはさあと肩をすくめただけだった。シユテイも知らないようだった。

君影はこめかみと目頭を順番に指先でマッサージしながら喋る。

「確かに、事故というだけじゃスッキリしなかつたけどな…。で、ちゃんと心当たりはあるんだろうな?」

「ありすぎて困っちゃうのよね」

急に女性の声が会話に割って入った。

「今日は一日お疲れさまで、もつまよつとつもあつてもひりつわよ、
後から入つて来たらしい静香は、会議室の扉に相対するように、
一番遠い席に座つた。

「で、結局俺たちどうすりやいいわけ? どのみちもう映画撮影だ
つてじまかしちやつたんだし警察にや届けないんだろ?」

今までの会話の流れを崩さず君影があけすけな物言いで静香に言
つた。

「そうね」

と静香は前置きして喋り始めた。

「映画の撮影で済ませたのは正解だつたわね、機転が良く利いてた
わ褒めてあげる。ただし、それくらいの能力を見込んでスカウトし
て育てたんだから当然といえば当然の結果よね」

「誰も褒めてくれだなんて言つてねえよ、俺たちお嬢の何でも屋兼
広報なんだからよ。お嬢の命令なら地球だつて守つちゃいますつて
か」

君影以外の四人は「ないない」と首を振る。

「地球なんかは守らなくともいいけど、私の島は守つてよね」

嬉しそうに静香は続ける。

「大きなことをやれば、大きな声で意見の違う誰かに気に入らない
つて言われるし、小さなことをやれば、やつぱり意見の違う誰かに
小さい声で気に入らないつて言われるし、その言い方が、どんな風
に現れるかっていう、それだけの違いだわ。

今回は、どうしても島の運営を大々的にやつてほしくないつて、
そつ言つて来たんでしょうね、前々からいるのよ、研究をやめろつ
て言つてくる奴が。

別に、研究がしたくて島買つたわけじゃないから止めてもいいん

だけれど、情報つていい商品になるんだものね、特に炭素と食料系つて。だから止めるなんて考えられないわ」

静香は長い睫毛に囲まれた目を心底楽しそうに細めた。

「だから、あなた方に頑張つてもらうしかないわけ。きっと楽しいことになるわよ」

ヤな話を聞いたと言わんばかりの顔で君影は舌打ちをした。

Critical condition -01- (後書き)

全体の三分の一くらいまで話が進みました。
これからは元々あるプロジェクトを少し変えてアップしていくので、
更新が遅くなると思われます。
コメントナサイ：

Critical condition - 02 - (前書き)

6 / 8 更新

走っている車は急には止まれないと同じように、走り出した計画はそう簡単には止められない。

しかも、最終段階に来たようなプロジェクトならなおさらだ。

引き返すことなんて出来ない。

たとえ、その中心にいる静香が死んだとしても…。

静香はある程度そんな妨害が、アーティングランドの営業開始に合わせて起こるといふことは覚悟していたんだろう、君影は今更ながら実感した。

静香は、君影たち観光を宣伝するためだけのタレントに対して、まるで要人警護を担当する警察官や自衛隊員のような訓練を施した。スカウトしたのもまるで無名のタレントともいえないような人間ばかり。

(ああ、そうか。むしろ逆なのか)

妨害する奴らが特定出来ないのなら、妨害し易そうなポイントをわざと作ったのか。だから、そのポイントに関係する人間の方を対処出来るように鍛えたのだ。

(つまり、まだまだこれから何かが起こることか)

アーティングランドの営業開始に合わせて、他にもイベントがある。

近傍にあるホールのこけら落ととなる、君影の単独ライブに五人全員が出るイオフロート内で開発された新素材を使ったファッショニシヨーがそれだ。

(名実ともに芸能人ですって言えるようになるには、今回のこけら落しを無事に乗り切つてからなんだな)

鼻をつくツンとした匂いにで君影は素に戻った。

自分のソロライブのゲネプロ中だった。

今はステージの上にいる。

真新しいステージは何もかもが新しく、ビニカベンキのような匂いがしていたのだが、急激にツンときて涙が出そうになつた。そして咳き込む。

「ちょ、ちょっとじめん！ なんか変だ！ 急にツンと来た！」

咳き込みつつも片手を上げて合図をしながら言つた。

なおも咳き込みながら君影はステージ中央から下手の舞台袖に駆け込んだ。

袖に待機していたスタッフの一人が君影にタオルを手渡し、君影はそれを受け取ると咳が収まるまでしばらく待つた。

「ねえ、スマーケ炊き過ぎじゃない？」

君影は回りに問う。

「いえ、今はスマーケマシン止めてますよ」

スタッフが返事をした。

「マジで？ なんかコゲっぽい感じだつたけど…。まさか袖幕が照明に当たつてコゲてたりとかしてねえ？」

冗談めかして言いながら、君影はタオルを返す。

「止めてごめん、戻る！」

君影が袖から出て立ち位置に向かいかけた瞬間、バチバチッと音がしてあたりが真つ暗になつた。

「停電だ！」

ざわめくスタッフの声。

暗闇の中で、舞台上の蓄光テープだけが浮かび上がつている。

ボンッ

と、もの凄い音がした。

舞台の客席の方からのように感じた。

「何だ！？」

誰かが声を上げる。

君影は音のした方向へ目を向けると、暗闇の中に光とその当たりが灰色つぼくなっているのを見つけた。

「誰か消火器持つてこい！ それと懐中電灯！」

君影は叫んだ。

よく段々暗闇に目が慣れてくると、燃えている場所が舞台の丁度一番客席側のあたりだということが見えた。そこには、モニターだったはず。

(モニターが爆発した？ こんな新しい設備で電気火災?)

「火事！？」

誰かがまた叫んだのを皮切りに「え！？」 「火事！？」 「どうして！？」などといった驚きがひしめく。

パニックになるいやな予感に、君影は消火に動こうとしたが、火の向こうになにか熊のような影が見えた。

(パンダの着ぐるみ野郎か？ あいつやつぱり犯人なのか！)

直感的にパンダの着ぐるみだと確信した君影は走り出した。

「スプリンクラー何で作動しないの？」

「火報切つてます！」

「水はダメだ水は！」

「きやつ」

走り出した君影は、懐中電灯を持ってわたわたとしているスタッフにぶつかった。目はパンダの着ぐるみをとらえたままだ。

「ごめん！ ちょっとどいて！」

数秒でパニックに陥ったスタッフに阻まれてパンダの着ぐるみが追えない。パンダの着ぐるみは君影の視界の中で奇妙な動きをしていた。

大きな箱を抱えて火のあたりをうかがいながらウロウロとしている。

(まだ何かするつもりなのか?)

パンダの着ぐるみは箱を抱えて火を中心にして左右にウロウロしながらなおも近づいていた。だんだんと、パンダの着ぐるみだと

いうことがはつきりしてくる。

「なんで!? なんでこんなに燃えてるの!」

「バカ! 消火器つてこい! 感電するぞ! プラグ関係全部抜け!

!」

「119番連絡は! ? 電気火災だつて伝えろ! 」

「連絡しました! 」

火へだんだんと近づいていったパンダの着ぐるみが、突然飛び上

がつたかと思うと、箱を置き視界から消えた。

「煙に巻かれたら死ぬぞ! 」

「懐中電灯! 」

「電源全部落として避難! 」

君影はパンダの着ぐるみが視界から突然いなくなり「え?」と思つたが、すぐに逃げたのだと思い負追おうとした。

(こんな時に多喜が入ればなあ)

一昨日に多喜がパンダの着ぐるみを見かけた時に後を追わせていたらこんな事態にならなかつたのだろうか? と、君影に一抹の後悔がよぎつたが、混乱した中で火が消える気配がない。君影は「チツ」と舌打ちをすると、パンダの着ぐるみを諦めて消火器を取りに行こうと、火に背を向けた。

「火が! 」

誰かが言つたのを聞き、振り返る。

「消えた! 」

また、誰かが言った。

君影の目の前で、誰かが消火器を火に向けていた。
が、その服装が問題だった。

(チャイナ服?)

火が消えるまでの一瞬だつたが、君影の目にはおかっぱ頭のチャイナ服の女が焼き付いた。

絶対にスタッフではない。

「誰だよアイツ! 」

また、得体の知れない不審人物の登場だ。
パンダの着ぐるみにチャイナ服の女…。

「あいつら絶対グルだ！」

畜生！　と君影は叫んでいた。

Critical condition -02- (後書き)

某サイトで iPad向けの電子書籍無料配布企画に参加しました。
が、公開されるかどうかわからないので、PDFにして配布しています。

ご興味がありましたら、パソコンからダウンロードしてやってください。

(h) <http://ioline.sakura.ne.jp/pdf/ioldokuhon.pdf>

時間軸としては5人が初顔合わせするくらいの時間軸で、
君影スカウト、シユティスカウト、初顔合わせ（漫画）、志智視点
で地獄のオリエンテーリングの始まり 4本のショートショートが
読むことができます。

Critical condition -03- (前書き)

6/9更新

キャラクターの設定書を見ていたら、今日（6/9）は君影の誕生日でした。

さてなぞなぞです、なぜ今日が君影の誕生日に設定されたのでしょうか？

ヒントは「リヨージシャン」答へは後書きにて！

(何なんだよ、あのパンダの着ぐるみと、中国服の女はよー、畜生、畜生!)

騒ぎの中で田に焼き付いた光景に君影は奥歯をきつと噛み締める。

本番が終わるまでの間に何かが起こるかもしれないと予測はしていたのに、捕まえられなかつたのが悔しくてしょうがないのだ。

「君ぐん襲われたんやつてえ？ アホみたいに運が良かつたらしいやん。一步間違つたらあの世行きつて、馬鹿は運がいいつてホントなんやなあ」

けたたましい声が会議室のドアからやつてきた。本人を確認するまでもなく志智だと君影は思った。

「『馬鹿は風邪ひかない』だろうが！ 運と馬鹿は関係ねーよ。つか、高学歴様は馬鹿じやないからこんな時はあつさりあの世行きつづーことだな御愁傷様！ 残念賞まだどうぞ！」

志智の言う通り「アホみたいに運が良かつた」というのは本当にあの時鼻にツンとくるような臭いに気がつかなかつたらどうなつていたか分からない。良くて全身火傷、悪くて死…。どのみち人前には出られないことになつていたはずだ。

しかし、何かが起こるかもしれないと予測していたからこそ、「何か変だな」と思った時に安全側に身体が動いた。

「高学歴で爽やかなおれはね、佳人薄命つて言葉が似合つちゃうようなイケメンなの、人生ケ・セラセラなの」

「意味わかんねえよ！ 佳人薄命とケ・セラセラになんの関係があるのか10文字以内で答えるよー ああ？ 高学歴さんよお」

「『なんにもかんけいない』ー！ 丁度10文字や、アホめー！」

「アホはどつちだ馬鹿め、それだと句読点の『。』が入ってねえだろうがよ、馬鹿が！」

「問題文に句読点念むつて書いてなかつたやないか。やつぱりまだまだ頭足りないちやんなんやね君くんは…」

「お前こじや、全部ひらがなで答えけやうあたり小学生かつづーの『きこへつ、なんやじつむかつくわねこの子！』

「あ、あ、あ、あの一人とも落ち着いて…ケンカはやめて…」

マネージャーがあらあらと割つて入るうとするが、けんか腰の君影と志智の勢いに負けてしまう。

「現場を見せて貰いましたけど」

そこにシユティが会議室へ到着した。ルイと多喜も一緒だ。

マネージャーは茶を用意するためといつ口実でそそくさと付属のパントリーへ引っ込んだ。

シユティは君影と志智の険悪な雰囲気には慣れっこになっていたので構わず続ける。

「本来ならモニターの下にないはずのナイロンとアセテートがあつたので何か仕掛けが施されていたようです」

「仕掛けって？」

君影はおつむ返しに尋ねる。

「さあ、詳しいことは分かりません。君影がシンとした臭いと言つていたのは多分アセテートが燃えた臭いじゃないかと思われます」

シユティは首を傾けて答えた。

「そうなのか、シンときてなんか臭い感じだった」

丁度、お茶の用意が出来たのか、マネージャーがそれぞれのお茶を用意して配る。その様子をシユティは目で追つているのを感じて君影もつられてマネージャーの黒いスタッフジャンパーの背中を見守つた。

「ナイロンが燃えても異臭がしますから、臭かつたのはそのせいかも知れませんね」

「そのおかげでオレ助かったのか…」

マネージャーは君影のライブのゲネプロを見ていたので、そのままスラッフジャンパーをずっと着たままだったようだ。

各自お茶が配されると無言で口をつけた。

ショティはお茶に手を付けずにマネージャーに声を掛けた。
「マネージャー、ジャンパーの下なんか黒いですけれどどうした
んですか？」

突然声をかけられてビクつとなつたマネージャーは「そ、そういう
んですか！？」とあたふたパントリーへ駆け込む。

「あはは、マネージャーおっちょこちょいやな」

マネージャーのいつものオドオドとした態度にその場が和んだ。
「でもさ、手口は分かんなくとも、犯人は分かつたぜ？」

「誰だれ？」

マネージャーのおかげで場の空気が変わったので、君影は落ち着いて切り出した。

「パンダの着ぐるみ、それから中国服の女がいたんだ」

「パンダの着ぐるみ…また出たんだ」

多喜がパンダの着ぐるみに反応した。

「おうよ、箱持つてウロウロしてたんだぜ、あつやしーのな」

君影は爆発が起こった後のことと手短に語つて聞かせた。

「しつかしそれだと中国服の人、火つけたのに消火活動しているや
んな、ウケるけど」

「燃えた現場の近くには、消火器が何本かと、ドライアイスの箱が
残されていましたので。君影が見たことと痕跡は一致しています」
なので、何かしらの理由で消火活動をしていったといつのは間違
がないようです。

「パンダの持つてた箱がドライアイスの箱だつたんかな？」

「君影の証言通りなら、おそらくは」

「ドライアイスをぶちまけて火い消したかつたんやな」

「おそらくは…」

「ドライアイスの箱を探すより消火器を探した方が早いと思いますけどね」

ルイが珍しく苦笑した顔をした。

「どうしたんやルイ」

「犯人なのがも知れないと、その慌てふためいている様に一種の愛らしさを感じてしまつて。爆発の規模から感じられる確実に殺そうという冷徹な意思とはそぐわない気がしたんです。それに、変装とはいえそんなに目立つ格好をしているのなら、監視カメラの映像からすぐにどこに誰だか分かりそうな気がしませんか」

「着替える前と着替えた後がどこかに写つていそうだもんななるほど、と君影は思った。

Critical condition -03- (後書き)

答え

6月9日はロクヒキュウで「ロックの日」だからです。（くだらぬ）

ハイ！ お後がよろしくよう！ また次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7727/>

I.O.Lデビューキャンペーンは危険が一杯！？

2010年10月8日14時04分発行